活動の概観

アピヌン！みなさん、こんにちは。私は城陽市出身の坂本晴彦といいます。私は現在、青年海外協力隊の環境教育隊員として、パプアニューギニア独立国のマヌス島ロレンガウ町役場に派遣されています。（アピヌン（apinun）はパプアの公用語であるトクピシン語で「こんにちは」を意味します。）今回はこの場をお借りして、パプアニューギニアのなかでも僻地である私の赴任地、ロレンガウ町での活動内容について、簡単にご紹介させていただきます。
島の概要についてご覧になっていただいた方はご承知と存じますが、経済のグローバル化にともなって、自然のものを地産地消してきたマヌス島にもさまざまな外国の製品が入ってくるようになりました。現在、町内には中国や東南アジアの人たちが経営する商店・薬局もあります。人が増え、町にお店がたくさん並ぶようになると、もちろんごみも増えます。しかし、マヌス島には日本のような焼却炉がありません。ごみ収集はマーケットや商店、あとは料金を払っている家だけ一軒一軒個別に集めます。ごみに対する関心は低く、各家庭でのごみの野焼きやポイ捨ては日常茶飯事です。ごみが増えるとそれに群がる蚊・ハエなどの害虫も増えます。これらの虫がマラリア・下痢などの感染症を媒介するため、ごみは島の景観や自然環境を悪化させるだけでなく、人々の健康被害にもつながっています。
こうしたなかで、私は学校での出前授業やイベント毎での清掃活動を通じて、町役場や町内の人たちとともに啓発活動を行っています。パプアの人々のおおらかな人柄もあり、町内の学校も協力的なので、快く私の活動を受け入れてくれています。昨年度は世界環境の日、独立記念日、アジア太平洋経済協力（APEC）開催に合わせたクリーンアップキャンペーンを行いました。清掃活動後の町は一時的にきれいにはなります。しかし、ポイ捨てがなくなるわけではないので、またすぐに汚くなるというくり返しになっています。また、ごみの処分方法も集めて積み上げるだけのオープンダンピング方式なので、処分場の汚染状況も深刻です。根本的な問題解決へのアプローチが必要と感じています。今後は学校での教育活動を継続しながら、町内に拠点回収のモデル地区を設定し、分別回収にも挑戦しようと思っています。
いろいろなことが急速に変わっていく現代社会。日本の社会が都市化していったように、マヌス島の人々もまた、現地で採れるブッシュフードとトロピカルフルーツだけの生活に戻ることはできません。持続可能な社会を実現するためには、その土地に応じて人びとのふるまいを高めていく必要があります。私の活動は残り 1 年 3 か月程度にはなりましたが、これからも現地の人たちとともにロレンガウ町の環境改善の一助になる活動をしていきます。